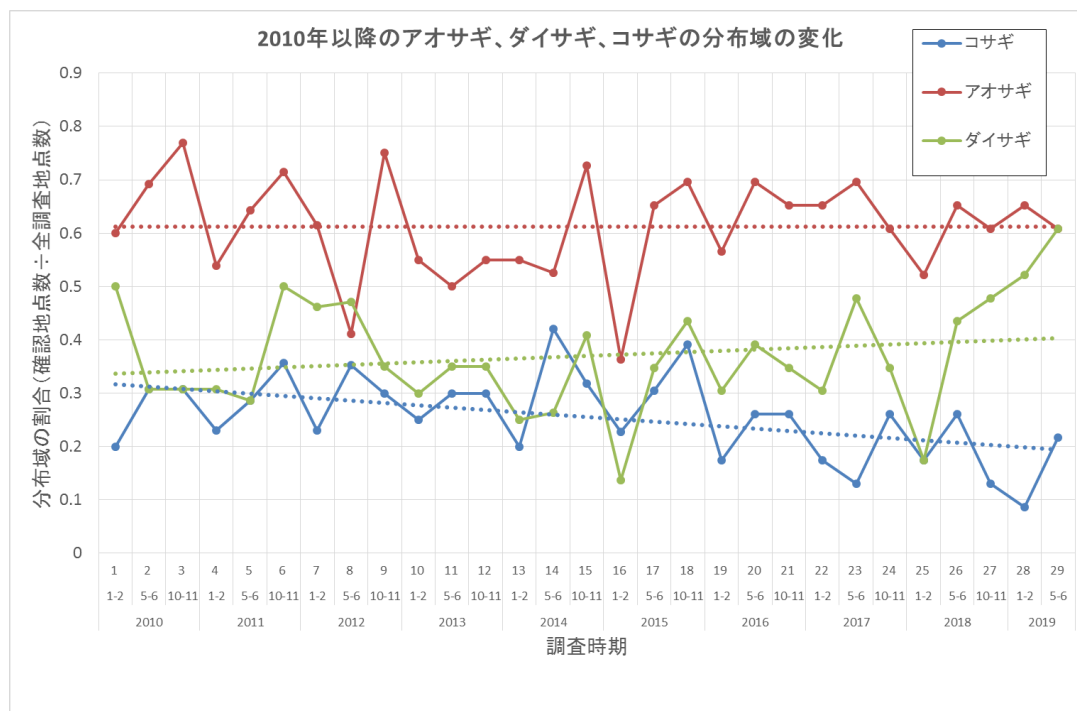


## 2019年5月～6月 モニタリング調査集計結果

調査・保護部

本年5月～6月のモニタリング調査結果がまとまりましたので報告します。詳細データはホームページを見ていただくとして、今回からしばらくの間、モニタリング調査データから見た生息域を拡大又は縮小している鳥について、分析結果を紹介させていただきたいと思えます。このモニタリング調査は個体数をカウントしているのですが、実は簡単なようで簡単に言えないのが個体数の増減です。ということで、とりあえず一步引いて分布域の変化（拡大又は縮小）についていろいろと調べています。というのは、直接の数の増減は分からなくても、分布域が拡大（縮小）＝個体数増加（減少）の可能性があると考えられるためです。このために2010年以降のモニタリングデータを使って、確認された全鳥種について、調査地点中の何カ所で確認されたかの割合を計算してみました。

まず、今回はアオサギ、ダイサギ、コサギの3種の分布域の分析結果を紹介します。



このグラフの中の破線は回帰直線と呼ばれているもので、統計学的に求められるものであり、グラフの変化の傾向を表すとされています（詳細は省略）。とりあえず「この破線が右上がりの傾向にあると分布域が拡大している可能性がある。逆の場合は分布域が減少している可能性がある」とご理解ください。

この回帰分析はどんなデータにでも使える方法ではなく、また回帰式が必ずしもデータの傾向を表すわけではないので注意が必要なのですが、今回対象としたサギ3種については感覚的な分布域と個体数の変化（コサギは若干減少、ダイサギは若干増加、アオサギは変化なし）が表れているように感じています。